

令和7年度 会派調査研究報告書

(視察先 1 か所につき 1 枚)

会派名	葦真クラブ		
出席者	宮川文憲・清水康雄・田原一孝・内藤正之・木内吉英・山本京子・石河一郎		
事業名	大阪・関西万博について		
事業区分	①研究研修②調査		

1. 葦崎市での課題と研修・調査の目的

2025年大阪・関西万博におけるルクセンブルク館は、「多様性と包摂」「サステナビリティ」といった国の哲学を体現するパビリオンであり、その建築には自然との共生や再利用可能な資材の使用など、持続可能な社会の実現に向けた多くの工夫が施されている。 そのような重要な国際イベントの会場において、本市に本社を置く建設会社が実際に施工を担った。これは本市としての大きな誇りであり、また地域産業の技術力と信頼性の高さを示す象徴的な事例である。 今回の視察では、建築としての特長や設計思想、使用されている素材や構造上の工夫などを実際に見学するとともに、ルクセンブルク館のコンセプトがどのように建物全体に表現されているかを学び、地元企業の成果に触れることを目的とした。

2. 実施概要

実施日時	令和7年6月25日（水）13:30～15:30		
視察先	大阪・関西万博について		
担当部局	ルクセンブルク館 責任者ナンシー様		
報告内容	1. 概要		
	ルクセンブルク大公国は、西ヨーロッパに位置する内陸国であり、ベルギー・フランス・ドイツに囲まれた小国ながら、高度な産業基盤と豊かな自然環境、多文化が共生する国家として知られている。 2025年大阪・関西万博におけるルクセンブルク館は、「Doki Doki - ときめくルクセンブルク」をテーマに掲げている。このパビリオンは、ルクセンブルクが描く持続可能な未来と循環型社会のビジョンを共有しながら、来場者の心が「ドキドキ」ときめくような体験の提供を目指している。 建物は膜屋根を持つ鉄骨構造で設計されており、循環型経済の原則に基づいて、万博終了後には可能な限り部材を再利用することが目標とされている。内部では、ルクセンブルクの自然や人々の暮らしについて、デジタル技術を活用して紹介されるとともに、伝統的な料理の提供も行われるなど、多角的にルクセンブルクという国を体感できる空間となっている。		
	2. 考察（これらの取り組みを葦崎市にどう活かせるか）		
	視察に訪れたルクセンブルク館は、まずその建築そのものが与えるインパクトの大きさに圧倒された。膜屋根を備えた開放的かつ未来的な構造は、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」にふさわしく、建築自体が一つのメッセージを発しているかのようであった。 また、この印象的な建築物を本市に本社を置く建設会社が施工しているという事実を前に、改めて地元企業の高い技術力と信頼性に誇りを感じた。特に、構造部材がすべて再利用可能であるという説明には強い驚きを覚え、循環型社会に対する実践的なアプローチを間近に見るこ		

とができた点も非常に学びが深かった。

館内では、自然と都市が調和したルクセンブルクの多様な暮らしや、地域に根ざした文化、エネルギーギッシュな国民性が、デジタル技術や展示空間を通じて立体的に表現されており、その構成はまさにテーマである「Doki Doki - ときめくルクセンブルク」にふさわしい内容であった。

蕪崎市においても、単なるインフラ整備にとどまらず、「空間が持つ意味」や「技術による表現」を意識したまちづくりのあり方を考えていくうえで、今回の視察は非常に刺激のかつ有意義な機会となった。

感想（まとめ）

ルクセンブルク館を訪れ、建築と展示が一体となって「ときめき=DokiDoki」を体現している様子に強い感銘を受けた。国の価値観や社会のあり方を、建物全体が語っているような空間であり、単なる展示施設ではない“体験する建築”として、視察した我々もドキドキし、心が揺さぶられた。

そのような建物を、本市の企業が実際に形にしているという事実を目にし、あらためて地元の技術力に対する誇りを感じた。世界に通用する力が、蕪崎にある——そのことを実感するとともに、こうした誇れる地域資源を、まちの未来づくりにも活かしていきたいと感じた。

そして何よりも、このような素晴らしい仕事を成し遂げた市内企業の存在を、より多くの市民に知っていただき、市全体で共有する誇りとしていければ良いと思った。地元の企業が世界の舞台で活躍しているという事実は、子どもたちをはじめとする次世代にも大きな希望と可能性を示すものであると思う。



※写真等がある場合は添付すること